



この子の歯磨き、
なんとかしてください！

この患者さん、
少し苦手……



ブラッシング 指導物語

丸森英史
編著

迷える歯科衛生士に届けたい



このままでは
大変なこと
になりますよ！

そんなこと、
わかってるん
です！！

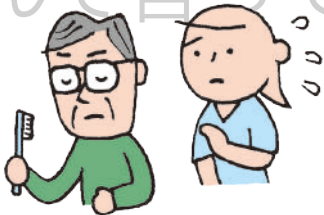


歯を磨く時間な
ありません！



また後戻り……

なんで言ってるのに伝わらないの？



年で…



これ以上良くなりません

Case

患者さんの多様性

1

39年間ブレない患者さん

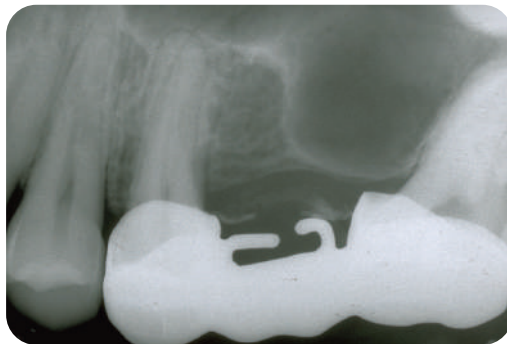


図1-① 初診時, 39歳, 男性 (1979年)

歯肉に強い炎症が認められる。X線写真からは111の歯根中央までの骨吸収が認められ、動揺がみられた。ブリッジの支台歯直下には強い炎症が認められた。ブラッシング指導を行ったところ、患者さんはブラッシングに非常に熱心に取り組まれた

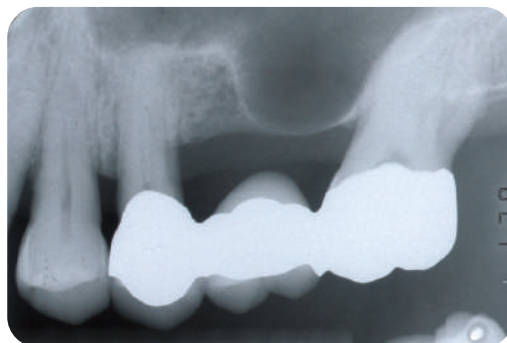
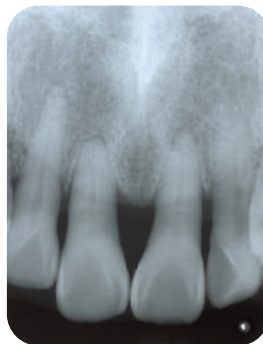


図1-② 38年後, 77歳時 (2017年). 適切なブラッシングを継続している (X線写真は2008年時)

上顎前歯部の処置はSRPのみ。「上の前歯がまさか残るとは思っていなかった。歯ブラシの効果ですね」。現在でも初診時の気持ちを思い出し、良いブラッシングの状態を維持されている。上顎左側臼歯部は18を抜歯し、SRPを行った後、補綴処置が行われた

毛先磨きの実際 小学生に実演してもらいました!



図1 8歳，女性
一見きれいだが，歯垢染色液を使うと磨き残しが明らかになった



図2 毛先磨き
毛先のコシを利用し，毛先を弾くように動かした後，プラークが残った部位をさらに狙って磨く．歯の形態や歯並びが異なるため，人それぞれの工夫が必要となる

図3 確認染めにより，1をきれいに磨けたことが確認できた

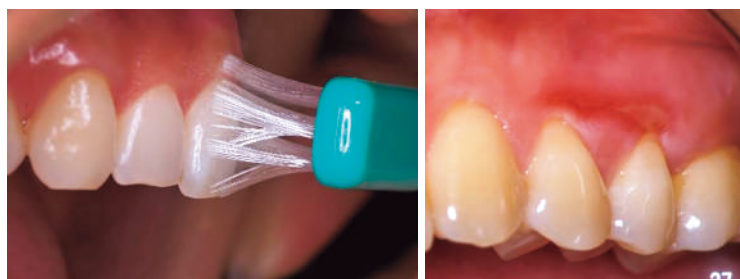


図4 毛先を押しつけると毛先が流れ，プラーク除去効率が悪くなり，歯肉を傷つけることがある



図5 当院で推奨している歯ブラシ(プロスペック，ジーシー)



図6 鉛筆による確認

CASE 3

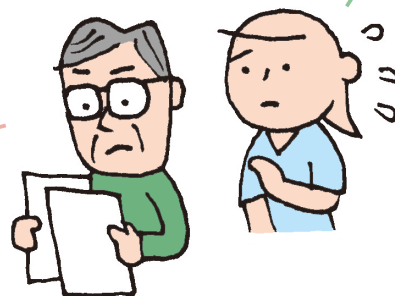
目も合わない，会話がぎこちない…… はじめは語りかけ にくかった患者さん

患者さん

○さん 男性，現在76歳
初診 2008年(62歳)
担当歯科衛生士との関わりは71歳から
家族構成 妻と2人暮らし
患者さんの背景 口腔内には齲蝕が多発し，歯周病，歯根破折も認められる。
初診時は上顎前歯の自然脱落を主訴に来院。ようやく安定したと思うと新たなトラブルが生じてくる

担当歯科衛生士

DH成井 歯科衛生士歴9年目から担当
○さんの妻，義理の娘，孫も担当している



担当初回時から○さんには話しかけにくい雰囲気を感じていました。ご挨拶をして近況をお伺いしても，表情がゆるむことなく淡々と現状を報告します。目も合いません。会話を終えるとすぐに持参した書類を熱心に眺めます。歯科医師が声をかけるとようやく表情がほころび，それなりに会話が進みますが，歯科医師が退室するとまたすぐ書類に目を落とします。

「○さんは要件だけ済ませてほしいのかも……」と思い，なるべく余計な雑談を挟まず，口腔内についての話や処置だけをするような関わりから始めました。

この症例のストーリー

なかなか話しかけにくい雰囲気をもった患者さん……。ブラッシング指導でも「指示されていないことはできない」という態度でなかなか打ち解けることができませんでした。少しずつ関係性を築きながら関わった様子を紹介します。

自分流を貫くOさん

関係性は徐々に改善していきましたが、次なる課題は口腔内の状態を安定させることです。以前より課題だった6の口蓋側遠心の炎症が強くなってきました。早めに炎症を抑えるために、補綴物の形態に沿わせて口蓋側からの歯間ブラシの挿入を提案しましたが(図3, 赤矢印)、なかなかうまく通すことができません。

このとき驚いたのは、Oさんの様子です。とても長い時間、口を開けたまま歯間ブラシを口蓋側から入れようと何度もトライを重ね、こちらが「いったん休憩しましょう!」と声をかけても頑に休みません。助言をしても取り入れていただけず、自分流のやり方を貫きます。

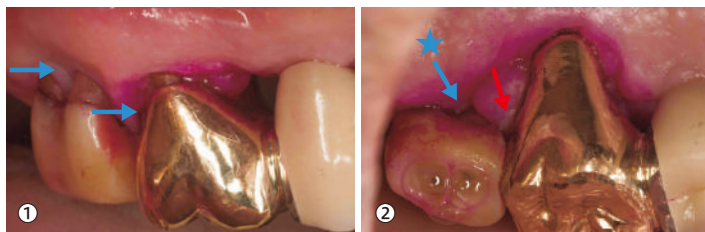


図3 歯間ブラシの使用

青矢印→：今まで歯間ブラシを通していった部位

赤矢印→：今回通そうとした部位

① 2(口蓋根は抜根済み)の根分岐部と、76間には以前より頬側から歯間ブラシを通していった(→)

② 76間の口蓋側(→)から歯間ブラシを通すよう指導した

CONVERSATION



(2の根分岐部, 図3★に入った瞬間に) あ! ……これは?!



ここじゃないですね、また1つ奥に入っています。



……え、ここじゃないの? 難しいなあ……。 …… いらだっている様子
ふう……。



内側から通すのはゆっくりまた練習してみましょう。

今まで通り外側から通しつつ、いろんな角度を付けてフォローしましょう!



外側から……。はい……。 …… できないまま指導を打ち切られたせいか? とても暗い表情。疲弊している

私はこう考えた!



Oさんの意外な一面から考える、今後の関わり方

Oさんはうまくできないことにいらだっているようにも見えた。これほどまでにOさんが自分流のやり方を追求して会得しようとするのなら、Oさんがギブアップするまでとことん待つべきだったか。Oさんが集中して“主体的に”取り組んでいる上達の機会を私が邪魔してしまったかもしれないと反省した。

CASE 6

「歯を磨く時間がない」「甘い物はやめられない」 それでも関わりは続く……



5歳. 厚みのあるプラークの付着, 歯肉炎が目立つ



24歳. この間齲蝕の発生は2本. 歯肉の状態は安定している (先端咬合位で撮影)

患者さん

Iさん 女性, 現在25歳

初診 2000年(4歳)

担当歯科衛生士との関わりは12歳から

家族構成 父・母(母親は結婚前から当院に通院)

患者さんの背景 母親と一緒に片道1時間以上かけて来院される。両親が共働きのため, 小さい頃から就寝時以外は近所の祖父母宅で過ごす



担当歯科衛生士

DH丸森 歯科衛生士歴1年目から担当

DH長島 歯科衛生士歴1年目に担当
(DH丸森の育休中)

この症例のストーリー

不十分なブラッシングと甘い物の影響が強く表れたIさんの口腔内(図1, 2). 私(DH丸森)が前任者から引き継いだ時は「せめて来院が途絶えないように」が目標でしたが, その後, ブラッシングが定着し, 甘い物についての考え方も変わってきました. 年齢とともにIさんの自立心が確立したことも大きな要素ですが, Iさんの変化に少なからず歯科衛生士との関わりが影響したのではないかとと思われる症例です.